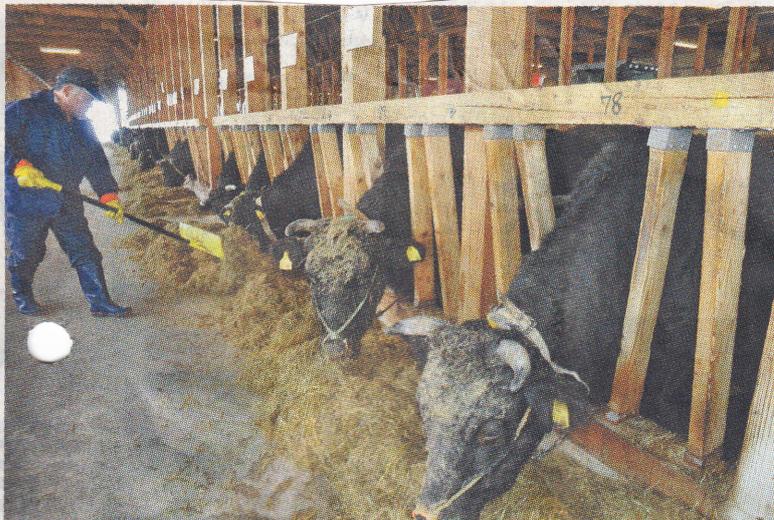


# 日本農業新聞



預託施設で牛に町内産の飼料を給与する(山形県真室川町で)

## 地元稲SGSなど活用

山形県のJA真室川は、和牛の肥育期の飼料原料を稲子実発酵飼料(稲ソフトグレインサイレージSGS)など真室川町産中心にし、飼料コストを4割以上減らした。飼料用米のSGSや転作大豆を配合した飼料で、町内産の自給率は可消化養分総量(TDN)ベースで75%と高い。飼料の運搬経費の抑制と水田フル活用のダブル効果が見込めることから、JAは安全・安心のブランド牛生産につなげる構想だ。

(日影耕造)

# 和牛飼料費4割減

## 山形・JA真室川 肥育効果も安定

費の内訳は配合飼料14万8000円、粗飼料2万8000円。1キ当たり単価は、配合飼料が約25円、粗飼料が約15円となった。

飼料の肥育効果は安定している。JAは2013年10月から15年2月までの1年4カ月、町営秋山牧場の和牛預託施設

で、月齢19カ月から34カ月で給与試験をした。枝肉の肉質等級はA3で、枝肉重量431キ、89万4000円でせり落とされた。飼料費を削減したことで利益分を確保した形だ。

今回の試験では肥育期間が短かったが、JAは子牛導入直後から肥育し

配合飼料に占める同町産SGSは、収穫したもみ米をすぐに加工・調製し、肥育農家の倉庫に1年分運び入れるため、保管コストが掛からない。転作物物として栽培する大豆は、規格外を使っている。

配合飼料だけでなく、粗飼料も運搬経費の削減を狙い、全て町内産だ。稲わらサイレージと稲発酵粗飼料(ホールクロップサイレージHCS)を給与する。

こうした工夫によって大幅なコスト減を実現した。JAの試算によると、肥育期間中の飼料費は17万6000円。従来の肥育の29万8000円を大きく下回った。飼料

た場合、さらにコスト減と産肉成績の向上が図れると見込む。JAの高橋敏経営管理委員会会長は「生産者や町と一体で繁殖・肥育の地域内一貫生産に取り組み、真室川町のブランド牛を育てる第一歩にしたい」と期待する。